CLOTH×OVER

糸と布 日常と生を綴る

Azamino Contemporary
あざみ野コンテンポラリー vol.13

あざみ野コンテンポラリー vol. 13
CLOTH × OVER
糸と布
日常と生を綴る

Azamino Contemporary vol.13
CLOTH × OVER
Thread and Fabric
–Writing the everyday and life

遠藤 薫 Endo Kaori
小林 万里子 Kobayashi Mariko
ユ・ソラ Yu Sora

03 ごあいさつ

04 日常と生を綴る糸と布
佐藤直子

06 小林万里子
ステイトメント
インタビュー
インスタレーションビュー

20 ユ・ソラ
ステイトメント
インタビュー
インスタレーションビュー

34 遠藤 薫
ステイトメント
インタビュー
インスタレーションビュー

50 作家略歴
Profile

52 Appendix
Greetings
Statements
Colophon
作品リスト List of Works

59 展覧会概要
関連イベント

美術という枠や社会的評価にとらわれず、様々なジャンルのアーティストが行っている表現活動に目を向けたシリーズ展「あざみ野コンテンポラリー」の第13回として開催します。このシリーズでは、表現活動の持つリアリティに着目し、現代的かつ挑戦的な内容を地域に開かれた施設として発信してきました。

本展では、「糸」「布」を素材として、「縫い」「織り」「刺繍」「染め」などの手法を通じて制作を続けている気鋭のアーティストたち―遠藤薫、小林万里子、ユ・ソラによる作品を取り上げます。糸や布は、人々の生活に密着した素材として、地域の歴史や文化に根ざして発展を遂げ、継承されてきたものも多く、その土地ごとの独自性を持つと同時に、人類の長い歴史とともに歩んできた素材であることから、普遍性をも包含しています。布は伸縮性に富み、裂いたり切断したり、縫い合わせたりすることで形を変え、人の身体や物を包み覆い、また内部と外部の境界となる機能なども果たしてきました。そして、人が日常的に触れることの多い布は、様々な記憶を呼び起こし、原初的な快・不快の感覚にも深く関わるものです。

この展覧会は、こうした身近な素材や手法を用いながら、日常の機微、労働や手仕事の視点、ひいては生成と消滅の循環について、アーティストそれぞれの視点から紡がれた日常的感覚が豊かにクロスオーバーする表現の世界をご紹介するものです。
最後に、本展を開催するにあたり、出品作家と様々なご協力をいただきましたすべての関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

横浜市民ギャラリーあざみ野

> 社会科学者や一般の人々は例のごとく社会を織られたり編まれたりする織物として述べる。しかし、社会の隠喩としての布、社会関係の隠喩としての糸は、結び付きだけでなくそれ以上のことを表現するのである。これらの材質のもつ柔らかさと本源的な脆さは人間のどのような関係も変わりやすいものであり、病気、死亡、腐朽という退行過程に影響されやすい人間のもつ弱さをとらえるのである。（J・シュナイダー／A・B・ワイナー編『布と人間』）*1

動植物由来の繊維を原料とし、温かく柔らかい触感で人や物を包み、保護する被膜としての布、人の手によって修復を繰り返しながら使い続けられてきた布――本展は、小林万里子、ユ・ソラ、遠藤薫による、おもに糸と布を表現媒体とした作品で構成される。

鑑賞者を最初に導く空間は、「闇からの再生」「生と死の反転」をテーマとする小林万里子によるものだ。小林は、一貫して生き物や生態系をモチーフとしてきた。作品中の生き物は、正確に観察描写されたものではない。それらは、生と死の連続体として地上に生きる生命のかたちを表したものといえるのではないだろうか。小林の制作スタジオには、麻、オーガンジー、綿、羊毛をはじめ、自身で染織を手がけた素材など、多くの糸や布を種類別に収めた引き出しが並ぶ。作品としてのかたちを成す前の素材が溢れるスタジオは、静寂のなかに熱気が満ちている。

> 木々の丸い隙間から空を見あげる。子どものころは、よくこうやって何時間も空を見ていた。草や花を摘んで、それを揺らしながら空の下を歩いた。（中略）その一歩一歩がステッチになって、布の上に刻みつけられていく。葉っぱや茎の形になって。わたしが、布のうえを歩いていた。」（ほしおさなえ『恩寵』）*2

これは小説に登場する植物の刺繍に長けた主人公の言葉だが、自然豊かな場所で過ごした子ども時代の原体験を語り*3、さまざまな素材を組み合わせて、身体のスケールを越える作品に取り組む小林の姿と、どこか重なるようだ。小林は、動植物が輝く美しい世界を、いつかは消滅して自然に還ってゆく生命を、糸と布によって留めようとしているのかもしれない。

続いて、ユ・ソラが柔らかい白地の布に糸で描き出すモチーフは、日常的な光景や室内の様子、日用品や雑貨など馴染み深いものが多い。ユは平面作品のほか、室内家具を模した原寸大の白布に包まれた立体を、部屋に見立てたインスタレーションとして提示する。その空間に足を踏み入れると、空気の対流によって微かに揺れる糸の存在に気づく。輪郭を縁取る糸の端が、長く垂れさがっているのだ。ユは、「今現在の瞬間の時間が流れていることが、糸が揺れたりすることで表現できると思い、思い切り糸を残すようにして」いるとし、玉留めしていない糸には、「間違って引っ張ったら全部輪郭が解けてかたちがなくなりそう」な不確かさがあり、それが「日常の脆さ」を表現することにつながっていると述べている*4。ところで、ユは作品における「白」について多くは語っていない。白地のノートにボールペンを使って部屋の様子をスケッチしたことが、一連の制作のきっかけになったようだが、ユの出身地韓国では、白は伝統色の一つであり、朝鮮半島に暮らす人々はかつて自らを「白衣の民族」と呼んでいたことがある*5。庶民は日常生活のほとんどで白一色の衣服を着用しており、白さを保つためには日々の洗濯が欠かせなかった。こうした日常の営みは、平穏な生活があればこそといえる。作品には、カタストロフィと地続きの現実を目の当たりにしてきたユの、安寧な日常への祈りが結ばれているのではないだろうか。

展覧会の最後は、遠藤薫が戦後沖縄の基地の中のクリスマスをイメージして立ち上げる空間だ。遠藤はこれまで沖縄や東北をはじめ国内外で、その地に根ざした工芸と歴史、生活と密接な関係にある政治の関係性を紐解きながら、おもに染織技法を用いて制作発表を続けてきた。本展では、遠藤作品に繰り返し登場するパラシュートの空気をはらむ傘の部分（キャノピー）や、沖縄での取材で集めた物を中心に、それらに刻まれた戦争の歴史や土地の記憶を丹念に掬い取り、映像とともに構成する。なかには、那覇軍港で働いていた沖縄の人が基地の中の日常を写した写真もあり、米軍から「沖縄の貧困層」*6 にむけてクリスマスプレゼントを配る風景などが捉えられている。これらは、作家の以前からの問題意識に語りかけ、今回は「贈与」あるいは「贈与の関係」から導き出される物事についての二面性を表すインスタレーションとして提示される。本展のテーマである糸と布に引き寄せて考えてみると、布は社会的・政治的意義を獲得する、贈与と交換の領域からもさまざまに論じられてきた。ジョン・Ⅴ・ムラは、贈り物をいっぱい持った征服者の「気前の良さ」、つまり被征服者に対して「文化的に価値づけられた消費財を強制的に放出すること」は「依存関係の第一段階」であり、「人々に互酬することを義務づける」と指摘している*7。「贈り物」には強制的な性質が備わっており、授かりものである一方、征服者に対する義務の強制があるといえるだろう。本作は「贈与」からみる、アメリカと沖縄の関係性について考察する機会にもなるかもしれない。

古代より手から手へ脈々と受け継がれてきた糸と布は、他の材質に比べ物質的に脆弱な一面もある。しかし、「退行過程に影響されやすい人間のもつ弱さをとらえる」布の「本源的な脆さ」が、それゆえに作家たちを魅了し、その柔軟性と可変性の高さは、それぞれが思い描く表現を可能にしている。本展がこうした作家たちによる表現を通して、日常に横たわる出来事について、改めて考え知る機会になればと思う。

（横浜市民ギャラリーあざみ野　学芸員）

*1　ジェーン・シュナイダー／アネット・B・ワイナー編『布と人間』（佐野敏行訳）ドメス出版, 1995, p.19
*2　ほしおさなえ『恩寵』角川書店,2008, p.19
*3,4　同冊子掲載の各作家インタビュー参照。
*5　岡田浩樹「10.白と原色のレトリック―韓民族の伝統としてのチマ・チョゴリ―」『繊維製品消費科学』1997,vol.38, no.6, pp.284-294
*6　写真に記されたメモ書きより。
*7　ジョン・Ⅴ・ムラ「第9章 インカ国家における布とその機能」『布と人間』p.426

Kobayashi Mariko
小林 万里子

全きものであった世界には、今や幾重もの境界線が引かれています。

生まれた時には皮膚という境界が「私とあなた」を、そして人間になる時には衣服という境界が「人間と動物」を、大人になる時には秩序という境界が「社会と自然」を隔てます。

生命を柔らかく包んでいた境界は、大人になるにつれ徐々に硬く分厚い壁のようなものへと変化していくのです。
なぜ人間は拒絶としての境界線を自ら進んで引いていき、硬い囲いの中へと進んでいくのでしょうか。

けれども矛盾したことに、私がこの世界で最初に「美」を認知できたのは、その硬い囲いの中で柔らかな生命に出会ったからでもありました。

人間の世界である「こちら側」に、動物の世界である「あちら側」から生き物がやってきて住み着いている風景は、境界のなかった全きものとしての世界の記憶を呼び起こしたのです。

隔てられたもの同士が出会う交点、その境界に立つことは、私にとってテキスタイルアートと対峙することと等価なものです。

なぜならテキスタイルは、人間が作りあげる境界の存在を視覚化し、両者を拒絶するのではなく光を通して柔らかく”繋ぐ”ことのできる皮膚のようなものだからです。

この２年間、人間が活動を停止していたことにより、多くの生き物が押し込められていた境界を抜け出し、生命の光を闇から再生させつつあります。

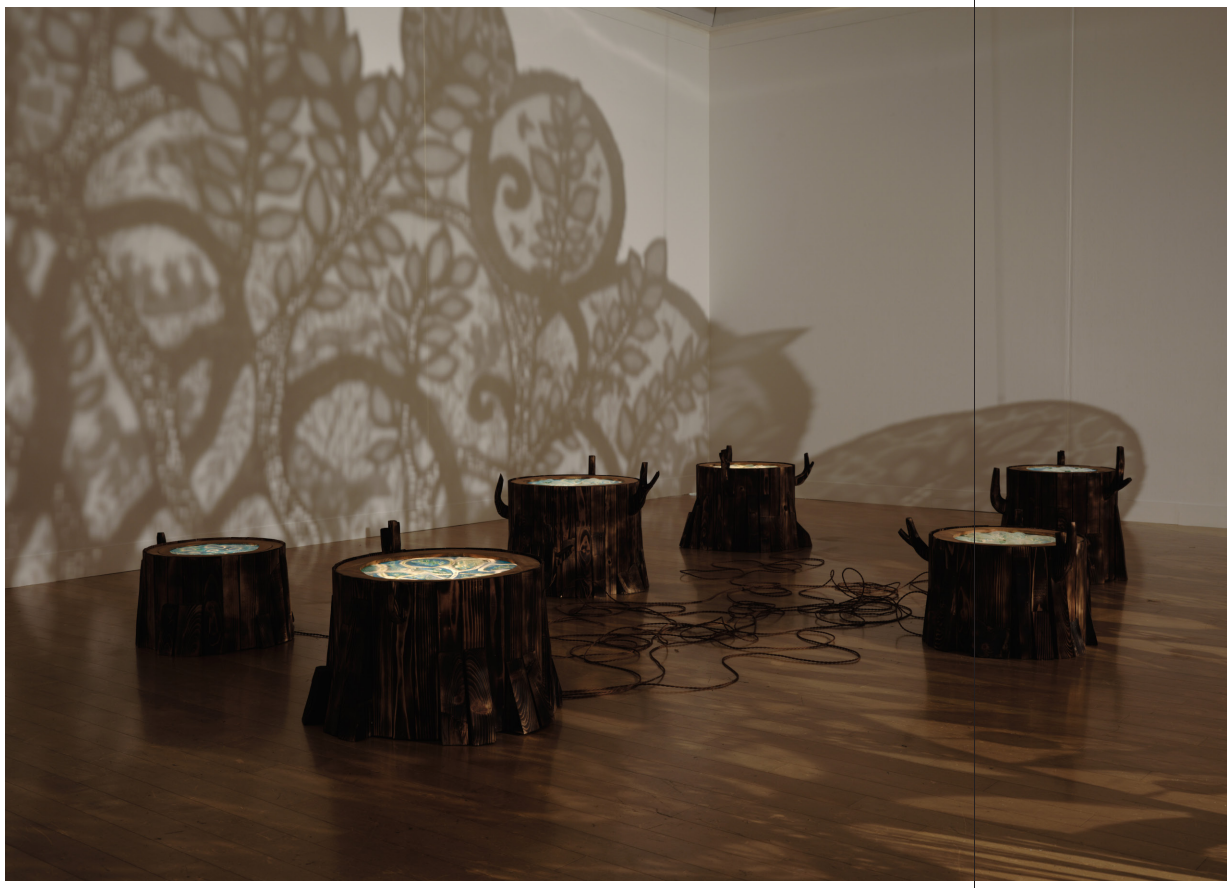
この展示では、世界に幾重にも引いてきた境界線を一つずつ無くしていけるのか、ということについて考えるための空間を生み出せればと思います。

――美術との出会い

子どもの頃に住んでいた場所は自然が多いところで、すぐ隣に大きな空き地がありました。そこにすごく大きなカタツムリが沢山住んでいて、雨になると必ず出会えるんです。生き物が自分の身近な場所にいて、ただそこに居るだけではなく生活を営んでいることに気づいた瞬間に、世界が輝いて見えたというか、絵本の中でしか知らなかったような生き物のくらしを、身近で知る機会がありました。すごく美しいものが、世界にあるんだなと、知るきっかけがそこにありました。その後、小学校２年生くらいの時に、図工の授業で好きなものを木でつくるという授業があり、出遅れてしまったため、あまり綺麗ではない塊の木しか残っていませんでしたが、その木を使って何をつくろうかと思った時に、カタツムリの事を思い出したんです。その時に作った作品は、自分の中ですごく良くできたと思えました。リアルに表現できたからというわけではなく、自分の感覚で、イメージをかたちに出来た、という手ごたえが感じられるものだったからだと思います。美術は、今すぐ必要なものではないけれど、長い時を越えて、なくなってしまう命とか時間が限られたものに、永遠の命を与えることができる、何か特殊な術だと思っているんですが、これが受け継がれてきた意味は、何かかたちに見えない、時間が経つと本当は消えてしまうものなんだけれど、術のなかでは閉じ込めておける―その大事さを、図工でつくった作品から初めて感じることができました。元々ものをつくったり、絵を描くことは好きだったのですが、初めて美術というものに出会った、という意味では、そのカタツムリをつくった時の感覚が思い出されて、今でも記憶に残っています。

――大学では、どのように制作に取り組んでいましたか?

とにかく課題が多く、とても忙しかったです。真面目な学生だったので、出された課題に全力で取り組んで、素材から出る答えというか、発するメッセージとかそういうものを含めて、表現するということを毎回の課題でやっていきました。やっていくうちに、自分に馴染む素材と、どうしても馴染まない素材が見えてくるので、その中で、自分が選び取った技術と、好きな素材を組み合わせて、制作するようにしてきました。元々、織りのコースでしたが、織りは、縦糸横糸があって、糸を織り込んでいくことで布になっていきます。私はそれだけで作品を完成させることに、あまりしっくりきませんでした。いつもテーマに持っていたのが、動物とか植物とか、この世界を成り立たせている様々な生き物で、どんな課題の時でも自分に引き寄せるようにしてテーマ設定して制作していたので、織りな



ら織りで、染めなら染めで、刺繍なら刺繍で、一つの作品、一つの技法、一つの素材に限定されるというのが、最終的な自分のテーマと合わないというか、満足できないということが、４年生くらいから段々出てきました。なので、途中からは、織った布に染めをして、刺繍をして、プリントをしたり、上から絵具で描くこともあったり、１回切ってばらばらにした素材を縫い合わせるとか、そういうふうに工夫をしながら制作しました。子どもの頃に最初に出会った美の感覚を、どうしたらこの素材を使って表現できるかということを、考えて過ごしていました。

――小林さんにとって「テキスタイル」とは何ですか?

簡単に言えば、染織―織り、染めというものになりますが、テキスタイルの織り、染めは、「織りなすもの」として捉えています。「織りなす」というのは、その様々な要素を組み合わせて、描き出すという意味があるのですが、その感覚がとてもしっくりときています。なので、テキスタイルというところで、技法とか素材を越えて、感覚的には色んな要素を組み込んで、一つにするものとして私は捉えています。

――作家として活動することを意識し始めたきっかけなど

卒業制作でつくっていた作品が《ユートピア》というタイトルで、地球環境の悪化みたいなものを描いた、大きなポスターのような作品で、今まで私が感じていた環境問題とか、自然に対する気持ちを入れた、最後の作品として取り組んでいたのですが、自分の内側にある感覚を、もう少し表現してみたい、追求してみたいと思うようになりました。その時は作家になるとは思ってはいなかったのですが、もう少し研究は深めたいと思い、大学院に行きました。そこで試行錯誤していくうちに、より追求していきたい部分が見えてくることが多く、就職も考えていましたが、大学院で２年間、自分の表現とか、何に興味を持っていたか研究し直していくと、どうしてもカタツムリとの出会いに戻ってしまう。卒業の時も、作家になると決めたわけではないですが、また子どもに戻る覚悟をしたというか、普通だったら大人として社会の一員になるという段階ですが、自分はもう一度子どもに戻って、忘れたくないことを忘れないようにする、という選択をしようと決めていました。卒業してから、その決意を胸に作家として頑張るぞというより、子どもとして戻っていくぞという感覚を持ち続けて、今に至ります。

――素材を選択する際の基準や、素材と作品の構想・イメージと

の関係について

私の場合は、つくりたいものが先にあって、こういう世界を描きたい、ということが最初にあります。こういうものを表現して、こういうふうに空間に、こういうものが広がっていたら、すごくワクワクするな、というのがいつも原点にあり、そこから素材を選んでいきます。よく選ぶものとしては、水分を含んでいるというか、そういうふうに感じるものが好きで、布とか糸とかも、冷たさとか温かさとか、皮膚に似たような感覚があります。絵画と違うのは、布の上に絵具だと、上に乗っかるのですが、染料だと中に浸み込んでいくので、結局水分を含んだ状態の素材を使うことになります。素材に含まれた水分が、自分の中の水分と呼応するような感覚があって、その為かあまりカサカサしたものは使いません。生き物を構成する要素の多くが水分なので、生き物を表現する時に、そういう何か湿気が感じられる素材が一番しっくりきています。一つの作品をつくる時には、その中に生態系のバランスみたいなものを含みたいという思いがあるので、水分、温かさ/冷たさ、そういう温度や感覚の違いを出しながら、一つの世界をつくるように意識しています。素材の選び方も、描く世界の中身で変わってきます。

――作品のサイズについてはどのような考えがありますか?

やはり子どもの時の、狭い世界なのに、ものが大きく見えるというか、いつも同じ場所で遊んでいるのに、そこから世界の広がりを感じていた、あの感覚が忘れられません。大人になると、世界中に行けるのに、何となく世界が狭く感じてしまうのは、想像力の問題なのか、色んな事を考えすぎてしまって、思考が狭まってしまうことは自分でも感じているので、作品をつくって人に見てもらう場合には、ワクワクしてもらいたいですし、その作品の中で描かれているものは小さな生き物の世界だとしても、その先に大きな広がりがあるという感覚になってほしい、というのは常にあります。なので、大きな作品をつくることに対して、いつも前向きというか、やってみたいと思う作品が、どうしても大きなものになってしまうところがあります。

――本展への出品作についておしえてください。

「闇からの再生」とか、「生と死の反転」をテーマにしています。今考えているのは、会場の真ん中に大きな作品が一つあって、手前と奥で世界が分かれていて、あちら側とこちら側を仕切るものとしての作品が真ん中にある。境界線の役目を果たすものがあります。

その境界線というのは、二つを隔てる壁ではなくて、光を通して、柔らかく二つの空間を繋ぐものとしての役目で、そこに配置しようと考えています。「闇からの再生」というテーマを思いついたのは、このパンデミックで、約２年間社会の動きが止まり、その期間を多くの人は苦しんで、闇の中にいるような感覚に陥っていたと思います。私の個人的な考えでは、闇は、もうずっと何年も前から広まっていた、始まっていたのではないかと考えていて、それをどの目線で考えるかで変わってくると思います。多分、人間以外の動植物にとっては、もう長い間、闇の中にいたのではないでしょうか。実際その２年のあいだに、多くの生き物が活動を活発に再開し、生命の再生が世界中で起きています。そう考えた時に、私たち人の活動とか、今までの暮らし方が、地球にとってどうなのか、考えざるを得ない時間だったと思います。見る方がどんな言葉を当てはめるかは、自由に考えていただきたいのですが、その二つの境界線に私たちは立っていて、隔てる壁をこれからもずっと壁として築き上げていくままなのか、それとも境界線を越えて、再生に向かっていくのか、何か境目に立っているような、今がそういう時代のような気がしています。

――あざみ野で初めて作品を見る人に向けて

私の作品は、一つ一つをじっくり見て、とても綺麗だね、というタイプではないと思っているので、どちらかと言うと、空間全体を体感してほしいです。さらにその時感じた楽しさ―楽しさを感じていただけるとすれば、何か人間の暮らし以外でも、色んな世界が色んなところに広がっているとか、入口が色んなところにあったんだ、という気づきを、空間全体から感じていただけたら、嬉しいなと思います。

（2022年８月９日 横浜市民ギャラリーあざみ野にて収録）

インタビュー動画

大好きな自分の部屋の中を描いたことから始まり、作品を作り続けている間に、何気ない日常の大切さに気づいた。当たり前のような日常は、ちょっとしたことでも簡単に崩れてしまう。災害や事故、コロナ禍や戦争など、多くの人が日常を失ってしまう姿をテレビやインターネットで見ている。自分にもそんな日が来るかもしれないという不安と恐怖が常に心の奥にある。

私たちの身近な所で、世界で続いている悲しいことに対して、私にできること。今を生きている人たちが日常の大切さに気づくような作品を作り、発信し続けることなのではないか。
私は街を歩きながらいろんな人の家を外から見る。天気の良い日、ベランダや庭に干されている洗濯物。雨の日はみんな窓に洗濯物を干す。玄関の鉢植え、閉まっているカーテンや食器棚の影。いつも私が、知らない人たちの似たような日常から感じている平和と安堵感を共有したい。みんなの、そして自分の心の奥の不安を少しでも和らげることができたらいい。

そういう思いで、どこの家にでもありそうな日常の姿や些細な経験を描こうとしている。

色のない、線だけで描かれた作品に、鑑賞者それぞれ自分の日常を重ねて欲しい。いつもの部屋の姿を見つめ直す小さなきっかけになって欲しい。

―美術との出会い

高校を出るまで田舎で育って、美術というものも、美術館などで見る機会がなかったんですが、漫画は好きで、子どもの時は漫画家になりたいと思って、一人で絵を描いたり練習したりしていました。高校に入ったら、出来ることは絵を描くことしかないと思い、美大に入ったのが、美術との出会いになりました。現代アートも大学に入ってから、初めて出会ったというか、まわりの友達に比べて遅かったんですが、そこから凄く深くはまって、今に至りました。

―― 弘益（ホンイク）大学校 彫塑科／繊維美術・ファッションデザイン科を専攻した理由

韓国には複数専攻という制度があって、最初にファッションデザインに入りました。でも、私が入った時期は、元は繊維美術という工芸科だったところに「ファッションデザイン」を付けたばかりの時で、何かちょっとわからない。それから、布の、何をつくっても自立しないところにイライラしてしまいました。韓国では彫塑科と言いますが、そこに入って自立する作品をつくりたいと思い、２番目の専攻として選びました。

―― 大学では、どのように制作に取り組んでいましたか?

とにかく課題が多くて、追われるように毎日何かをつくっていました。その中で、立体作品をつくりたいという気持ちが大きかったのですが、技術も足りなくて、時間も足りなくて。家にたまたまあった材料で、ぬいぐるみのように布に綿をいっぱいに入れて、パンパンにしたら立体になるかと思って、つくったものが初めて褒められたりしました。それが今の作品のスタートでした。最初は自分の顔をつくって、それに綿を入れて、立体的に見えるようにしたり、どんどん発展させていって、今の作品になりました。

―― 「日常」というテーマもその頃に取り入れたのですか?

最初に布でつくったのは大学１年の時ですが、またほかの課題に追われて、しばらくそれを置いていました。でも、あとから「これが一番いい」と言われることもありました。その後、課題に追われている自分の部屋がすごく汚い日に、それを片付けようと思っていたところ、２時間くらいずっとベッドの上で部屋の中を描いていたことがあって、それが自分の部屋を描き始めるきっかけになりました。最初は、自分の部屋が好きというすごくシンプルなことから始まったんですが、色んな経験を重ねて、日常に対しての気持ちだったり、もっと伝えたいこととか、そういうことが段々変わってきて、今のような作品になりました。

―― 日本と韓国では、日常の捉え方にどのような変化がありましたか?

2011年に韓国で大学を出た時、ちょうど3.11の時に私は横浜にいたんですが、揺れた時は渋谷にいました。その時の経験から、色んな人の日常が一気に消えた、ということが、日常に対して深く考えるきっかけになりました。その時横浜で展示をしていましたが、それがつながって、日本でも色んな展覧会に出品するようになりました。日本に来る機会も沢山あったのですが、その中で、何かが韓国とは違う、説明もできないし何が違うのかもわからない、でも何か気になる、もっと知りたいということが何年も続きました。同時に、ソウルでの生活に疲れた時期でもあり、一回離れてみようと思ったんです。色んな事が重なって東京藝術大学に留学することを決めました。（日本は）ヨーロッパやアメリカよりも近いし、文化も言語も似ていて、考え方は似ているところもあるけれど、すごく違うところもあります。そこをちゃんと知ることで、今までの韓国での生活だけでなく、これからどう生きていくのかということについて、理解することができるのではないかと考えました。こちらで生活してみたいと思って日本に来ました。

　自分の日常だけではなくて、街を歩いて、知らない人の家のベランダとか、窓のカーテンが開いている様子などは、ほかの人の日常を見るきっかけになりました。ほかの人の日常はどうかなと、もっと普遍的な日常をちゃんとわかって研究して、それを表現できるようになった方が、もっと多くの人に私の作品に共感してもらえるのではないかと思い、ほかの人の日常を見ることを大事にしています。

―― 白い布と黒い糸、これらの素材を使い始めた経緯について

この作品をつくり始めるきっかけになるのが、散らかっていた自分の部屋をノートにボールペンで描いたものです。それがスタートだったので、ボールペンで描いた絵のように見えるけれど、近づいてみたら柔らかい布で出来ている、というのが面白いかなと思って試してみました。温かい雰囲気をつくりたいと思って、素材を色々試しました。他の種類の白い布や他の色の糸を使ったり、刺繍のように色で埋めてみたり、色々試してみました。少しボリューム感のある布素材を使っているのですが、何かそれ自体の柔らかさ、そ

れを活かすには、白い布と黒い糸だけで十分ではないかと思い、色は白と黒だけにしています。

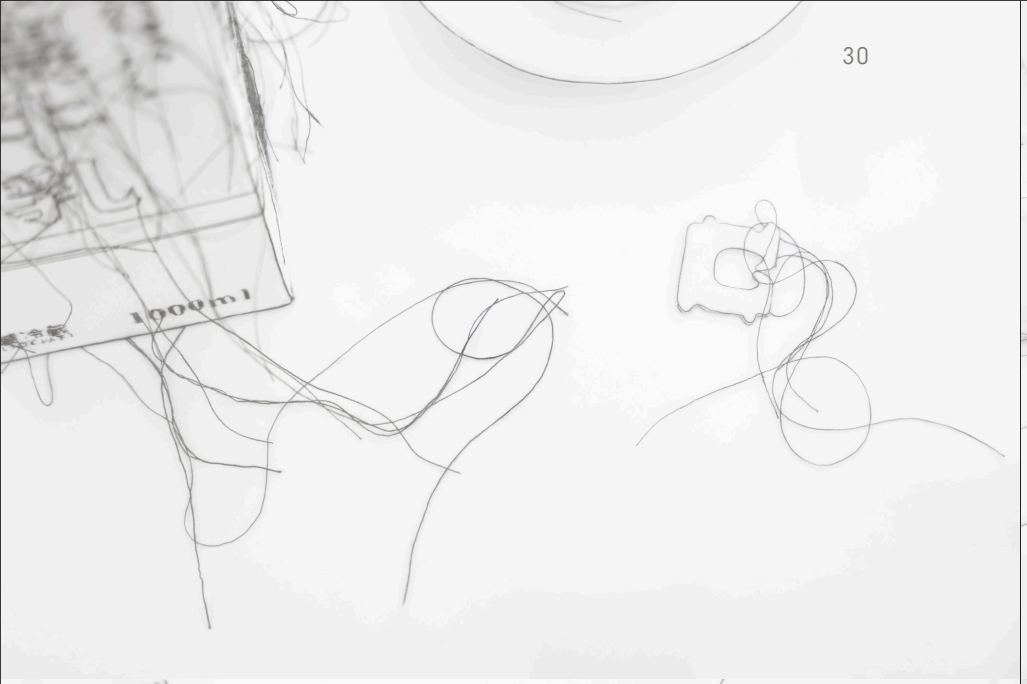
――黒い糸は処理をしていませんが、それはどうしてですか?

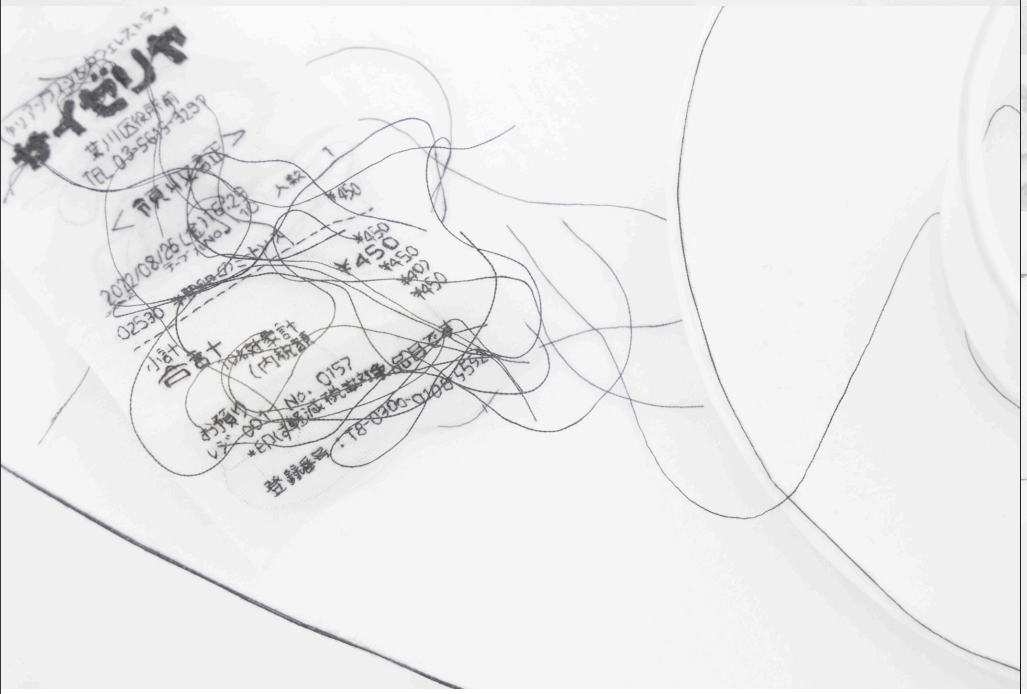
鉛筆やボールペンで描いた時にちょっと線が残ってしまうとか、それを後で消すかどうかは人に拠りますが、そういうふうに私の場合は糸で描いて、その糸が少し残っているんだという感じで、全部処理していないのが面白いと言われます。人が近づくと作品から出ている糸が少し揺れたり、空調でも少し揺れたりするのが、自分でも説明できないけれど、雰囲気に影響していることに気付くようになりました。平面の場合に糸を残しているのは、展示してそれを梱包して、次にどこかで出した時には、その残していた糸が違う形になります。ずっと変わり続ける、そういうことも面白いなと思っています。日常のある瞬間を切り取って、時間が止まったようなインスタレーションの部屋をつくっていますが、人が近づいて、その瞬間の、今現在の瞬間の時間が流れていることが、糸が揺れたりすることで表現できると思い、思い切り糸を残すようにしています。立体になって気づいたのは、輪郭を黒い糸で縁取って表現していますが、糸を処理していない、ちゃんと止めていないので、何か間違って引っ張ったら全部輪郭が解けてかたちがなくなりそうな、そういったことも感じられます。それが、私が今表現したい、日常の脆さ、そうしたものにちょうどはまるのではないかと思っています。

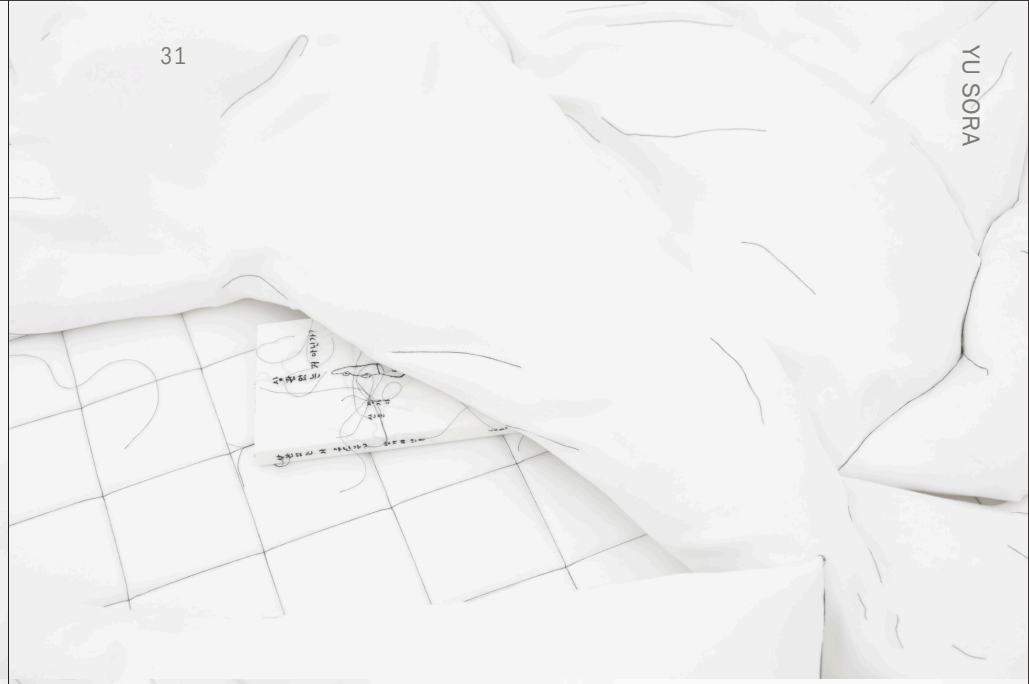
――平面作品と立体・インスタレーションについて

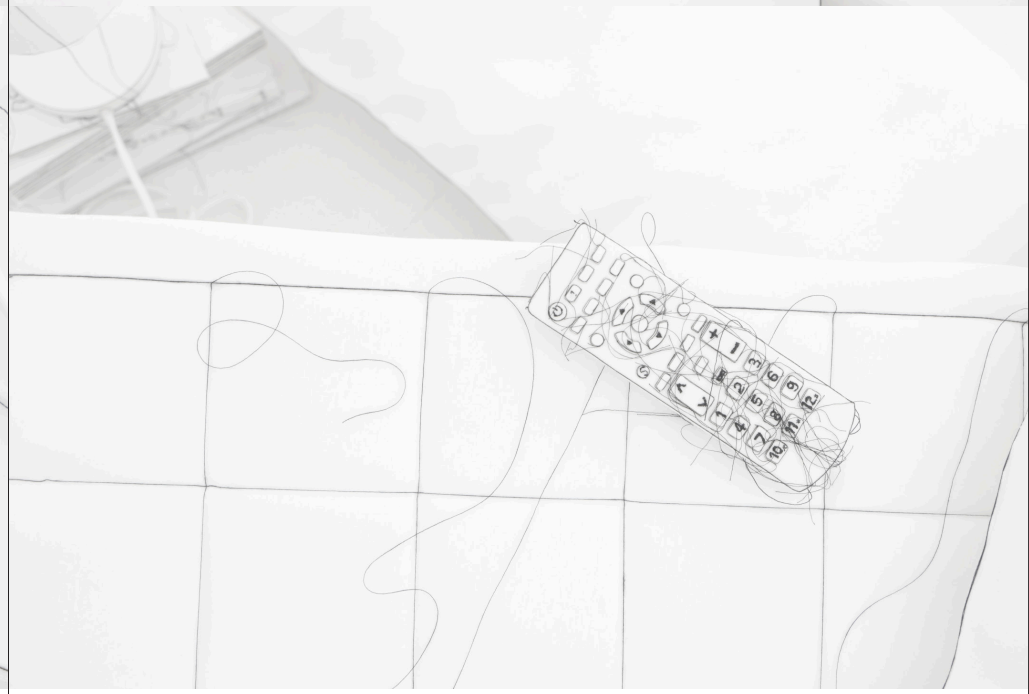
平面作品は、当初自分の部屋の散らかっているところを描くことで、作品を見た人も「私の部屋も散らかっているよ」「これうちにもあるよ」というフィードバックが楽しくて、そこからまたつながって、次の作品になったりしました。自分の身の回りの物を描いているけれど、ほかの人の日常ともつながると思っています。自分の部屋、自分の物を描くことにすごくこだわっていました。留学前の時期には、自分すぎるというふうに、ちょっと詰まってしまって。やはり誰が見ても、これは日常の姿だと思ってほしくて、そこからほかの人の日常も見るようになりました。

　立体のインスタレーションでは、自分の持っている物だけではなくて、みんなが持っていそうな物、家でやっていそうなことは何だろうと考えました。ほかの人の家などを垣間見たり、観察しながら悩んでいたことを、立体でつくっています。例えば自分の部屋にはソファも大きいテーブルも置いていませんが、もっと家族の人数が


1000ml







多かったり、部屋がもっと広かったり、ということもあるので、みんなの日常をつくりたいと思って取り組んでいます。最近は結構インスタグラムを見て参考にしています。

――本展への出品作についておしえてください。

今回は部屋の立体のインスタレーションに集中しようと思っています。何回かこのインスタレーションを続けてみたら、毎回同じように感じたり、自分の中で少し悩むこともありますが、この「部屋のインスタレーション」で続けたいことは、みんなが生活している部屋の中、家具などいつも同じ物があるけれど、毎日少しずつ配置が換わったり、物が増えたり、それが日常の普通の姿なので、それを私が色んな展示を重ねていく中で、同じ家具が登場しても、そこに置いてある細々した物で、少しずつ変えていく、そういう作品にしたいと思っています。

――あざみ野で初めて作品を見る人に向けて

私は、悲しい思いを色々とする中で、日常を通して皆さんに見せたい、日常を大切にしましょうということを伝えたいと思って作品をつくっているのですが、普通に楽しんでもらいたいです。初めて見ていただいた方にも、これ知ってるとか、これ家にもあるとか、そういうものを見つけて楽しんでいただきたいです。ぐしゃっとしたレシートをモチーフにした作品が面白いと思ったら、家に帰った時に、転がっているレシートを見て、いつもと違って見えたらそれでいいかなと思っています。それが、それぞれの日常を大切にする小さなきっかけになったらいいなと思います。毎回展示する会場によって、どういう人が来るか想像して、周辺のお店に関係するものを入れたり、ちょっとした見つけてもらいたいところもつくっていますので、ぜひ細かいところまで見て楽しんでいただければと思います。

（2022年7月16日 横浜市民ギャラリーあざみ野にて収録）

インタビュー動画

Endo Kaori
遠藤 薫

いろんな場所にでかけては、そこで知ったことを布の形にして、使ってみたりしています。

あらゆる道具のなかでも、最も身体との距離と時間とが密接な関係性をもつ、第二の皮膚としての布。人と布が生きてゆく延長線上には、社会と政治が必ず繋がっています。ことに布には、あらゆる環境が意識/無意識の中で織り込まれてしまっている、と私は考えています。

もしかすると、動植物から成る布がどうしても外部からの負荷によって、簡単に汚れ損なわれ、土に還ってしまうような“弱さ”を持ち合わせていることが、そのような性質と関係しているのかもしれません。

つまり、布はそのときの“時間”を短い命として現しているもの、なのかもしれません。

たとえば、私は、その地の歴史や政治への反応として、捨てられる布を集めて大きな雑巾にして掃除をしてみたり、必要あればそれらに修復を重ねる。落下傘をつくってはそれを風に膨らませて地を転げ回ったりしています。

それは、いつも私の意志とは無関係に何かの象徴を示します。そのような行為の連なりの一つの点として、本展覧会ではどのような形が立ち上がるのか、私もまだなにもわかっていないのですが、ここに現れた何事かを一緒にみつめてもらえたら、と思います。

――美術との出会い

小さい頃から絵は描いていました。家で留守番していたことが多くて、他にすることがなかったという感じで。好きとか嫌いとかではなく、ただ、そのまま（無心に）絵を描いていけたらなぁ、という気持ちはありました。

――琉球ガラスに興味を持ったきっかけ

そんな幼少時代に、琉球ガラスの職人である稲嶺盛吉さんのドキュメンタリー番組を見て、衝撃を受けました。琉球ガラスは、米軍基地に捨てられているコカ・コーラ瓶を溶かして作られているのですが、廃瓶を用いた再生ガラスは製作過程の中でどうしても泡が入ってしまいます。その泡をむしろ意匠にしようと考えて、もみ殻や砂、黒糖など身近な不純物を混ぜ合わせて、琉球泡ガラスが作られているんですね。そこに、負の要素や環境を美しいものに反転させるような手触りを感じて、心から離れなくなりました。

――沖縄での学生生活について

そんな琉球ガラスの事を勉強しようと沖縄県立芸術大学に進学するのですが、ガラスについて学べる学科がなかったんです。そこで、染織を専攻することになります。入学してすぐ、実技の授業では、米軍が射撃練習用に使った後の、火薬が抜けた弾（薬莢）を利用して染めものの道具作りをしましょう、というものでした。戦争で途絶えてしまった沖縄の型絵染（紅型）は、このように、レコード盤をヘラに用いたり、将校さんの奥さんの口紅で赤色をさしたり、と基地から捨てられるような物資を再利用しつつ復興されました。この授業を受けて、ここには琉球ガラスと同じ考え方がある、と気づきました。私はマテリアルそのものの美しさに興味があるのではなくて、人々がある状況下に置かれて、生活の中やむにやまれず作られていくような工芸の成り立ちや、歴史背景みたいなものに惹かれているんだなとも、ぼんやり自覚し始めました。工芸や民具は意識・無意識に限らず、よくその時代を映してしまうものなのかな、と。

――現代美術とはどのような接点や出会いがありましたか?

そのようなことに興味があったので、普通に紅型を染めることに段々と違和感を覚え始めてしまったんですね。真面目に授業や制作に取り組むというよりは、沖縄の街や海を歩いて、黒人街で音楽を聞きに行って、音楽イベントを企画したり。

※このテキストは、横浜市民ギャラリーあざみ野にて収録されたインタビューをもとに、作家本人による加筆修正を加え再構成しました。

そんな中、風営法*1 の罰則が強化される、ということが起こりました。風営法はとにかく「踊ってはいけないよ」と言う。お店によってはさまざまな経営体制や現場があると思いますが、私の通っていた、スピーカーに顔を寄せて真剣にただ音楽を聴くようなクラブまで経営難に追い込まれるなんて、悲しくて仕方ありませんでした。そこで「私たちは決して踊っていません、うどんをこねているんです!」という内容のイベントを何度も企画したりしました。フロアにうどんのたねを敷いて、ダンスミュージックを聞きながら、うどんを踏み、茹で、食べ、また踊る。卒業後も、お着物の作品発表や実家の家業でもある書道もあいかわらず続けていたんですが、このようなイベントのように、やっていることが微妙な領域というか、他の音楽企画をしても、なんだかどこにも属せないなという感覚がありまして…。そんな中、たまたま私の家を訪ねてきてくれたギャラリスト兼キュレーターの方がいて。私の部屋にはたくさんの、毎晩寝る前に書いていた、自分ではただのお習字だと思っていた作品がありました。それは伝統ある書道展には発表できないようなものだったのですが、その方が、「地元の芸術祭に出してみよう!」とおっしゃってくれて。その時、美術の形態というのが私のやりたいことにすごく合っているのかな、と思いました。作品になる前のちょっとした萌芽みたいなものでも、そこに居ていいよねって受け入れてくれる感じが美術にあることに気づいて、救われたような、安心した気持ちになりました。

――京都のアルスシムラへ行くことにした経緯

沖縄で工芸の勉強をしていると、工芸というのは、制作する場所やそこに生きる人がいて、その中で自然と作られたもの、ということを実感しました。同時に、自分は沖縄の人になれないんだ、ということも強く思い知らされました。そんな中、何をもって紅型としていいのか、ということが全然わからなくなってしまいました。モチーフなのか、素材なのか、沖縄の人であるということなのか。そういうことがずっとわからず、学生の頃から作品をつくるのに戸惑っていました。

それなら、自分の生まれ育った場所のことに目を向けてみよう、と。そこで、地元である大阪で、注染で手拭いを染める工場に勤めてみたりしました。なのですが、工場は機械による近代産業です。化学染料によって手が荒れてしまったり、機械の事故など、さまざまな問題と向き合うことになりました。このような問題を解決するには、もう少し素材の事を考えなければいけないな、と。

そこで、植物染料で作品を制作している志村ふくみさんの元を訪ねて、学ばせていただくことにしました。彼女は、パウル・クレー

を参考にするだとか、文学や哲学の要素を取り入れて作品に落とし込みます。民藝協会から破門のような扱いを受けても、独自の姿勢を崩さずに作品をつくっている人なので、共感というとおこがましいですが、もっと知りたいなと思い、近くで少しでも学ぶことができたら、どんなにいいだろうと思って、学校の試験を受けました。

――志村ふくみさんから学んだこと

志村さんは、自分のつくりたいものに色を寄せていくのではなく、その季節ごとの、その植物が一番いい時期に、一番煎じの無理のない、一番透明感高い色を取り出して、糸に移す。そのような制作のあり方を、年中続けていて。つまり、自分の想像上の色に植物を合わせようとするのではなくて、その植物が持つ最大限のよい色を、そのまま織り込んでゆく。織り込んでくうちに、糸と糸同士が、「次の色はこれだよ」とささやく声を聞いて、その声に従っていく。そのような制作のあり方に感銘を受けました。

　自然の法則に従っていくと、自ずと人智を越えるような何事かが立ち上がる。ふくみさんからは、布が、色が本当に好き、という空気がたくさん出ていて、そういう気持ちが、何よりもまず先立つことが、“自然”そのものなんだろうな、と。

――遠藤さんにとって「布」とは何ですか?

このように、布とはたまたま触れ合うことになったわけですが、布と向き合っていくと、すごく面白いと思うことが沢山あることがわかりました。例えば、焼物は一度焼くと土に還らなかったり、素材である自然の土ができるまでにも長い時間を有します。ものの一生が非常に長いんです。一方、布はすぐに土に還りますよね。植物性に限らず絹や羊毛、皮などの動物性だとしてもすぐ土に還ってしまう。貝塚などでも、布というものは炭化しない限り、残らない。そのようにスッと消えてしまう感じや、損傷していく感じに、なぜかすごく魅力を感じていまして。

　そういえば、布に関してはっきりと覚えていることがあります。沖縄に行きたいと思いはじめた10歳くらいのことなのですが。布団で寝ている時、ふと自分が身に纏っている布の存在のことをとても不思議に感じたのです。布団やパジャマの布目を見ても、一体これはどういうふうにつくられているんだろう、と。わからなくなって、眠れなくなったのを覚えています。他の家具や本などの存在はなんとなく理解できたけれど、なぜか、どうしても、布が理解できなかったです。

　実際、織機はコンピュータの前身だというくらい、ハイテクノロジーの源流なんですよね。イギリスでジャガート織りが始まってから、産業革命が始まっていく、まさに近代化の一つの流れの中にあるものです。また、実は布というものは、こんなふうに織機で織られる必要がなかったという説があるんです。極寒の地で油を塗って生きていた民族がいるそうで。極論的にいえば、人が生きてゆくのに必ずしも防具や防寒具として織物が必要というわけでもないそうです。例えば、毛皮もそうですが、タパ*2 は不織布です。フェルトや樹皮布がある時点で、わざわざこういうふうに織っていく必要がなかったかもしれない、という説もあります。

　しかも織りの技術が、今ある最新のテクノロジーと繋がっているということ。織りの世界が、0と1の二進法でなるコンピュータの世界を生み出してしまう。布は一番身体に近い道具のはずなのに、一番よくわからないものだという感覚が強く、そういう人類の秘密みたいなものをわからないなりに触れていたいです。

――あざみ野で初めて作品を見る人に向けて

私は、作品を見られることをあまり意識しない方がいいな、と思いながら制作するようになりました。鑑賞してもらう、という意識はもちろんあります。ですが、私が秘密で取り組んでいることも沢山あるので、あまり全部伝え切ろうとは思っていません。場所とか、歴史とか、もういない人とか、そういうところでのやり取りを「置いておく」という感じ、と言えばいいでしょうか。それをただ、目撃してもらうくらいがちょうどいいのかなと。私から何かを「渡す」というよりは、ここでこうして「ある」ところを見てもらえたらいいのかなという気がしています。

*1　風俗営業等の規制及び業務の適性化等に関する法律
*2　オセアニアの伝統的な樹皮布

（インタビュー収録：2022年8月9日）

インタビュー動画

遠藤 薫
習作：1945 年のクリスマスパーティーと 1964 年の東京オリンピック / 沖縄

・動画
沖縄の海辺にて、1960 年代に作られた米軍のパラシュートを引っ張りながら歩く

・写真
「米兵たち・沖縄のクリスマス(1945)」
「米軍が主催する、沖縄那覇市貧困階級へのクリスマスチャリティーイベント(1961-)」
「米軍より、ジェット機事故死亡者である男の未亡人へのクリスマスプレゼント(1961)』

「読谷の米軍基地トリイ・ステーション(ゲートが何故か鳥居の形をしている)」

「米軍基地(那覇軍港)で働く人々とコカコーラ、ビーチパーティ、忘年会など」

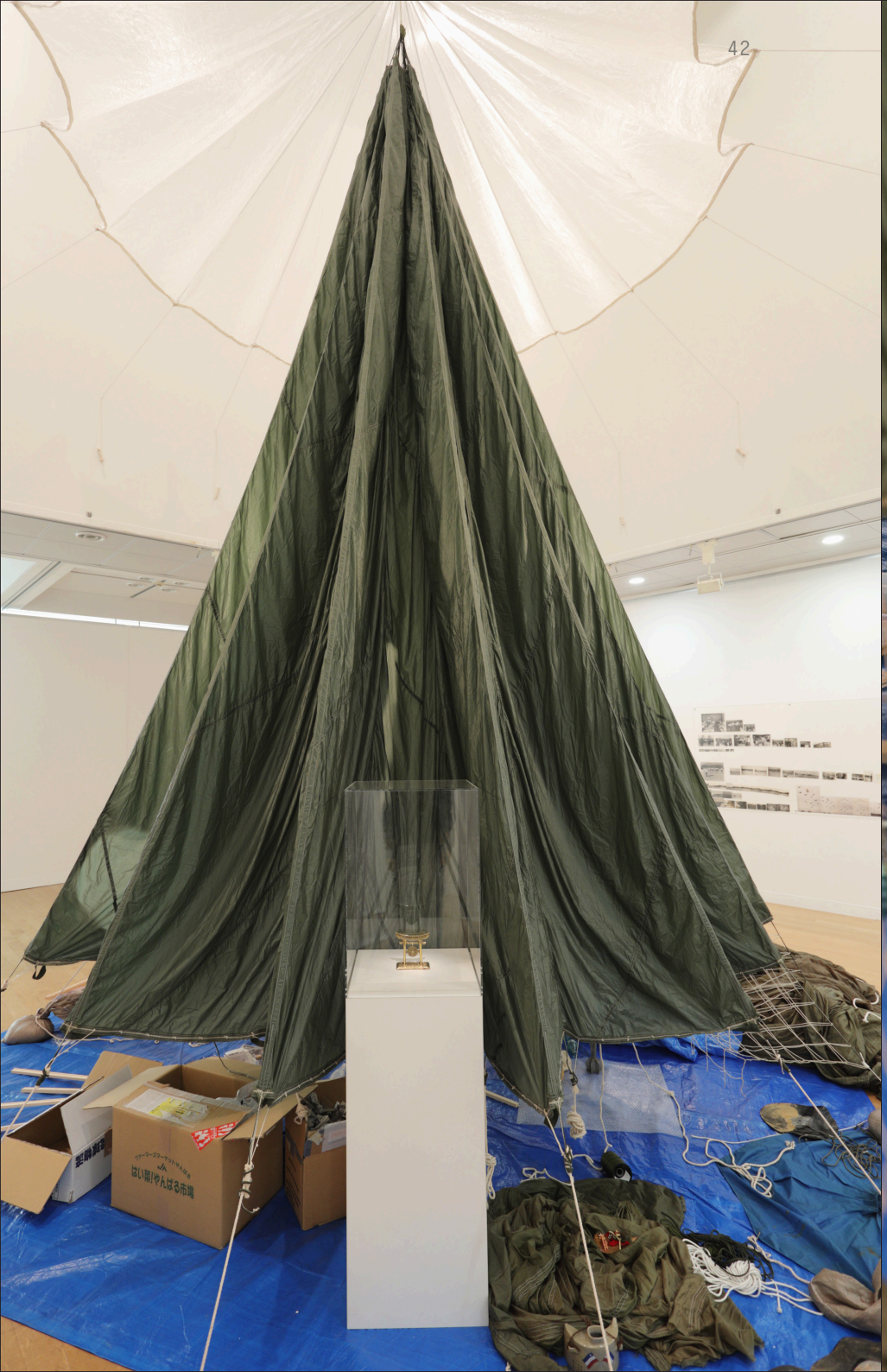
「1964 年、東京オリンピックの聖火が沖縄のブラウン管テレビを通して放映されているようす」
→当時の沖縄はアメリカの統治下にありましたが、東京オリンピックにおける聖火リレーは沖縄から始まりました。

「使用済みパラシュートの再利用(アーケード・ウェディングドレスなど)」
「ベトナム通り(嘉手納基地の間を通る、米軍に黙認された道路)にて開催される闇市のようす」

・物
沖縄米軍基地より 1964 年製のパラシュート(緑と白)

1945 年製コーラ瓶
ベトナム通りにて拾ったレコード
陶器手榴弾、薬莢
無宗教の米兵のドッグタグプレート
「米国軍政府琉球旗設定」記念の抱瓶(1950 年)
沖縄米海軍の鳥居型トロフィー(1995 年製)
溶けたコーラ瓶
嘉手納基地の土
辺野古の赤土
貝やサンゴ
錆びた有刺鉄線

・資料
『美と力：1964 Tokyo Olympics』＜東京オリンピック関連資料＞読売新聞社(1964 年)


はい笑!やんばる市場

遠藤 薫

1989年 大阪府生まれ
2013年 沖縄県立芸術大学工芸専攻染織科卒業
2016年 志村ふくみ（紬織，重要無形文化財保持者）主宰アルスシムラ卒業

沖縄や東北をはじめ国内外で、その地に根ざした工芸と歴史、生活と密接な関係にある政治の関係性を紐解き、主に染織技法を用いて、制作発表を続けている。主に雑巾や落下傘、船の帆などを制作し、「使う」ことで布の生と人々の生を自身の身体を用いてパフォーマティブにトレースし、工芸の本質を拡張することを制作の核とする。

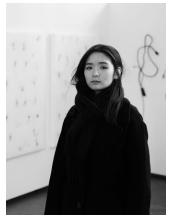
近年の主な展覧会に2019年個展「第13回 shiseido art egg」（資生堂ギャラリー／東京）、2021年「Welcome, Stranger, to this Place」（東京藝術大学大学美術館／東京）、2021年「琉球の横顔 ― 描かれた「私」からの出発」（沖縄県立博物館・美術館／沖縄）、2022年国際芸術祭「あいち2022」STILL ALIVE（愛知県名古屋市、一宮市、常滑市）など。2019年「第13回 shiseido art egg」art egg大賞受賞。

小林 万里子

1987年 大阪府生まれ
2012年 多摩美術大学大学院テキスタイルデザイン領域修了

織る、染める、編む、刺す、といったテキスタイル技法を用い多様な素材を組み合わせていく方法で、世界に存在する様々な結びつきを表現する。人と動物を分ける境界線としての肉体が土へと還る長い時間や、死してから他の生き物として命が再生する道のりを描くといったように、我々が「人」として生きる「今」という時間を繕きながら制作を行う。重層的に織りなされる色や形によって現れる混沌のイメージの中から、生命の本質的な姿を描き出すことを試みている。

近年の主な展覧会に2020年個展「背負うだけなら太陽だけでいい」by KOTARO NUKAGA（CADAN/東京）、2021年個展「オーバーストーリー」（KOTARO NUKAGA/東京）、2021年「Reborn-Art Festival 2021-22」（宮城県石巻市街地、牡鹿半島、女川駅周辺）、2022年「前三三、後三三」（san gallery /台湾）、「美作三湯芸術温度2022」（岡山）など。2019年「ONE ART AWARD」（台湾）最優秀賞受賞。



撮影：加藤甫

ユ・ソラ

1987年　韓国、京畿道生まれ
2011年　弘益大学（韓国）繊維美術ファッションデザイン科/彫刻科卒業
2020年　東京藝術大学大学院彫刻科修了

日本と韓国を拠点に、災害や事故などで突然失うこともある日常や些細な日々をテーマに、白く柔らかい布に黒い糸で刺繍を施し、日常の風景を記録するような立体・平面作品を制作発表している。近年は家具や電化製品の置かれた「部屋」全体を、白い布とほつれた黒い糸でつくりだし、鑑賞者が非日常空間に身を置くことで「普通の」日常とは何かについて問い直すような展示を行っている。

近年の主な展覧会に2017年個展「引越し」（YCC Gallery/神奈川）、2020年「Art Award Tokyo Marunouchi 2020」（新丸ビル/東京）、2021年個展「普通の日」（あまらぶアートラボ・A-Lab/兵庫）、2021年個展「些細な記念日」（ギャラリーhwaso/仁川、韓国）、2022年個展「BankART Under35 2022」（BankART KAIKO）、など。2018年「Tokyo Midtown Award」優秀賞、2020年藝大杜賞、買上げ賞、2022年「Sanwa company Art Award」グランプリ受賞、「第16回shiseido art egg」入選。

Greetings

This exhibition is the 13th in the Azamino Contemporary series, which focuses on expressive activities carried out by artists of various genres, without being bound by the framework of art or social evaluation. The series has focused on the reality of expressive activities and has presented contemporary and challenging content as an institution open to the community.

This exhibition features works by up-and-coming artists - Kaoru Endo, Mariko Kobayashi and Sora Yu - who continue to work with 'thread' and 'cloth' as materials through methods such as 'sewing', 'weaving', 'embroidery' and 'dyeing'. Thread and cloth are materials closely connected to people's daily lives, and many of them have developed and been handed down through local history and culture. Cloth is highly elastic and can be torn, cut and stitched together to change its shape, and has served to wrap and cover the human body and objects, as well as to serve as a boundary between the inside and the outside. Cloth, which people come into contact with on a daily basis, evokes various memories and is deeply related to our primitive senses of pleasure and discomfort.

This exhibition introduces a world of rich crossover of everyday sensations spun from the perspective of each artist, using these familiar materials and techniques to explore the subtleties of daily life, the perspective of labour and handwork, and ultimately the cycle of creation and disappearance.
Finally, we would like to express our sincere gratitude to the exhibiting artists and all those who have cooperated with us in various ways in organising this exhibition.

Yokohama Civic Art Gallery Azamino

Statement

The world, once all-encompassing, is now drawn with multiple borders.

At the moment of birth, the skin is the boundary that separates “you and I.” When we become social beings, clothing separates “man and animal.” When we become adults, the order separates “society and nature.”

The boundaries, which used to gently embrace life, gradually transform into tough and thick walls as we grow older.

Why do humans draw boundaries to reject and voluntarily move into rugged enclosures?

Yet, contradictorily, it was within these enclosures where I first recognized the “beauty” of this world as I encountered gentle lives.

Creatures from “the other side,” the animal world, come and settle on “this side,” the human world. This scenery evokes memories of the world when it was unified without borders.

Standing at the intersection or on the borderline where two divided things meet is equivalent to working with textile art for me.

Textiles are like skin that can visualize the presence of human-made boundaries. It lets light through, softly “connecting” both sides rather than rejecting them.

As the activities of human beings were deactivated in the past two years, many creatures have started freeing themselves from the enclosures which had forcefully captured them. Now, the light of life is being generated from the darkness.

In this exhibition, I hope to create a space wherein we are able to consider whether we can eliminate, one by one, the boundaries layered on the world.

Kobayashi Mariko

It all started when I depicted the interior of my room which I loved. As I continued making art, I realized the importance of ordinary, everyday life. Any tiny thing can easily disrupt the daily routine that we take for granted. Both television and the Internet constantly feed me with images of disasters, accidents, COVID-19, and wars, and show me how forcefully these events can change people’s everyday lives. In the back of my mind, these images always make me afraid and anxious that such a day may come for me.

What can I do about the sorrowful events that persist in my immediate environment and the world? It may be to continue creating and presenting works that make people aware of the present moment and the preciousness of everyday life. I walk around town and look at various people’s homes from the outside. On sunny days, laundry is hung on balconies and in gardens. On rainy days, everyone puts their laundry by the window, potted plants are arranged by the front door, curtains are closed, and there are shadows of cupboards. I want to share the peace and relief that I feel from viewing the lives of people I don’t know. I wish I could ease

everyone's deepest fears as well as my own. With this in mind, I try to depict the appearance of everyday and trivial experiences familiar to any house. I hope each viewer will connect their daily life with the works drawn without color but with lines. I hope my work gives a small opportunity to rethink the usual appearances of rooms.

YU SORA

I go to various places, translate what I learn into a form with cloth, and try using it.

Among all tools, cloth has the most intimate relationship with the body in terms of distance and time, as a second skin. At the extension of the lives of people and cloth, society and politics are inevitably connected. I especially believe that all environments are consciously or unconsciously woven into fabric.

Perhaps this nature is tied to the "fragility" of cloth, made from plants and animals, which can be easily soiled, damaged by external stresses, and returned to the land.

In other words, cloth may be an expression of "time" in specific moments, manifested as a brief life. For example, in response to the histories and politics of a place, I sometimes collect discarded clothes and turn them into a large duster which I could use for cleaning or, if necessary, repair them. I also make a parachute, let it inflate in the wind, and roll around on the ground with it.

It always presents some symbolism regardless of my will. I do not know yet what form will emerge at this exhibition, as a point in the chain of such actions, but I hope you will join me in observing the events happening here.

Endo Kaori

Profile

Endo Kaori

1989 Born in Osaka
2013 Graduated with a bachelor's degree in textiles from the Okinawa Prefectural University of Arts
2016 Graduated from Ars Shimura led by Fukumi Shimura (Living National Treasure for tumugi (pongee) weaving).

Based in Okinawa, Tohoku, and other areas in Japan and abroad, Endo continues to create and exhibit works — mainly using dyeing and weaving techniques — that unravel the political relations intimately embedded in the crafts, histories, and livelihoods rooted in the locality. She creates rags,

parachutes, sails, and other "usable" objects, activates them by using her own body, and performatively traces the vitality of fabric and people, thereby essentially expanding the potential of crafts.

Her recent exhibitions include the solo exhibition The 13th shiseido art egg (2019, Shiseido Gallery, Tokyo), Welcome, Stranger, to this Place (2021, The University Art Museum, Tokyo University of the Arts, Tokyo), Portraits of Ryukyu: Turnover from Models to Artists (2021, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, Okinawa), and Aichi Triennale 2022: STILL ALIVE (Nagoya City, Ichinomiya City, Tokoname City, Aichi Prefecture). She is the recipient of the 13th Shiseido Art Egg Award.

Kobayashi Mariko

1987 Born in Osaka Prefecture
2012 Graduated from Textile Design at the Graduate School of Tama Art University

Kobayashi expresses the various connections that exist in the world by combining various materials using textile techniques such as weaving, dyeing, knitting, and stitching.

Her work expresses the long span of time of the body — the boundary between humans and animals — returning to the earth and the process of regaining life as a different living creature. Thus, the artist attempts to depict the essence of life through the chaos of images that emerge from the interweaving layers of colors and shapes.

Her recent exhibitions include the solo exhibitions You Only Need to Bear the Sun by KOTARO NUKAGA (2020, CADAN YURAKUCHO, Tokyo) and Stories that went Over (2021, KOTARO NUKAGA, Tokyo) as well as the Reborn-Art Festival 2021-22 (Ishinomaki City center, Oshika Peninsula, and areas around Onagawa Station in Miyagi Prefecture), Between Before and After (2022, San Gallery, Taiwan), and Three hot springs of Mimasaka Art Temperature 2022 (Okayama).

She is the recipient of the Grand Prize of ONE ART AWARD (2019, Taiwan).

YU SORA

1987 Born in Gyeonggi-do, South Korea
2011 Graduated from Hongik University (Korea), Department of Textile Art and Fashion Design / Sculpture
2020 Graduated with a master's degree in Sculpture, Tokyo University of the Arts

everyday life that can suddenly be lost due to disasters and accidents. She creates and exhibits three-dimensional and two-dimensional works as records of everyday scenes by embroidering soft white cloth with black threads. In recent years, she has been creating entire "rooms" — with furniture and electrical appliances and using white fabric and frayed black threads — which make viewers question what "normal" everyday life is while being in an extraordinary space.

Her recent exhibitions include the Art Award Tokyo Marunouchi 2020 (Shin-Marunouchi Building, Tokyo) and the solo exhibitions Hikkoshi (moving) (2017, YCC Gallery, Kanagawa), An Ordinary Day (2021, A-Lab, Amagasaki, Hyogo), Sasai na Kinenbi (a trivial anniversary) (2021, Gallery hwaso, Incheon, South Korea), and BankART Under35 2022 (BankART KAIKO). She is a recipient of the Excellent Prize of Tokyo Midtown Award (2018), the Mori Award and Museum Purchase Award from the Tokyo University of the Arts (2020), and the Grand Prize of Sanwa Contemporary Art Award (2022) and was selected for the 16th shiseido art egg award.

Exhibition

Azamino Contemporary vol.13
CLOTH×OVER
Thread and Fabric – Writing the everyday and life

October 8 [Sat] – October 30 [Sun], 2022
Yokohama Civic Art Gallery Azamino [Gallery 1]
Closed: October 24 [Mon]
Opening Hours: 10:00-18:00
Free admission
Organized by Yokohama Civic Art Gallery Azamino
(Yokohama Arts Foundation)
Grants from Japan Arts Fund, Nomura Foundation
In Cooperation with Faculty of Media Studies,
Josai International University

Related events

Artists Talk
Speakers: Endo Kaori, Kobayashi Mariko, Yu Sora
Date&Time: 14:00-15:30, October 8[Sat]
Venue: 3F Atelier

Workshop:
The House We Live in— Let's make a model of your house!
Lecturer: Yu Sora
Date&Time: 14:00-16:00, October 22[Sat]
Venue: 3F Atelier

AZAMINO COLLEGE:
The Art of Ruth Asawa
Lecturer: Sawayama Ryo (Art Critic)
Date&Time: 14:00-16:00, October 29[Sat]
Venue: 3F Atelier

*Conducted Japanese only

Curated by Numata Hideko, Sato Naoko, Hibiya Akiko

Filmed and Edited of Artist Interview by Nishino Masanobu
Promotional Video by Faculty of Media Studies,
Josai International University

Text written by Endo Kaori, Kobayashi Mariko, Yu Sora, Sato Naoko
English translation by Hirano Mayumi
Copy-edited by Dominic Zinampan
Photo by Yoshikawa Shusaku
Designed by Yoneyama Natsuko
Printed by NOGE Printing Corp.

Edited and Published by
Yokohama Civic Art Gallery Azamino (Yokohama Arts Foundation)

凡例 ・各作品データは次の順に記載した。作品名／制作年／素材／サイズ（縦×横×奥行）・すべて作家蔵

作品リスト

ー
小林 万里子

1
Apotheosis
2019
土、粘土、珪藻土、木綿、
麻、羊毛、アクリルガッシュ
110×150cm
12頁

2
Sense of wonder
2022
粘土
3.9×10.4×3.6cm
13頁、14頁上

3
4つ目の境界
2022
麻、綿、オーガンジー、
染め、刺繍
300×600cm
09-11頁、16頁

4
未生の現在
2022
木材、和紙、刺繍
サイズ可変、6点組
14頁下、15頁

ー
ユ・ソラ

5
引き出しの中のもの
2017
糸、布、プラスチック
30×42cm

6
積み重なっている日々
2022
糸、布、綿、キャンバス
90×90cm

7
積み重なっている日々
2022
糸、布、綿、キャンバス
90×90cm

8
積み重なっている日々
2022
糸、布、綿、キャンバス
90×90cm

9
棚の上
2012
糸、布、綿、キャンバス
30×30cm

10
机の下のもの
2022
糸、布、綿、キャンバス
160×110cm
25頁

11
机の下のもの
2022
糸、布、綿、キャンバス
160×110cm

12
記録された日々：夜の散歩
2022
糸、布
12.6×5.6cm

13
日々をかさね、
2022
糸、布、プラスチック等
サイズ可変
30頁上

14
おやすみ、おはよう
2022
ミクストメディア、インスタレーション
26-29頁、30頁下、31頁

ー
遠藤薫

15
習作：
1945年のクリスマスパーティーと
1964年の東京オリンピック／沖縄
2022
インスタレーション（動画、写真、物
［パラシュート、コーラ瓶など］、資料）
40-49頁

—
Kobayashi Mariko

1
Apotheosis
2019
Soil, clay, diatomaceous earth, cotton, linen, wool, acrylic gouache
110×150cm
p. 12

2
Sense of wonder
2022
Clay
3.9×10.4×3.6cm
p. 13, p. 14 (top)

3
The fourth boundary
2022
Linen, cotton, organdie, dyed, embroidered
300×600cm
pp. 09–11, p. 16

4
Unborn present
2022
Wood, Japanese paper, embroidery
Dimensions variable, set of 6
p. 14 (bottom), p. 15

—
Yu Sora

5
Things in the drawer
2017
Mixed media
30×42cm

6
Days piling up
2022
Mixed media
90×90cm

7
Days piling up
2022
Mixed media
90×90cm

8
Days piling up
2022
Mixed media
90×90cm

9
on the shelf
2012
Mixed media
30×30cm

10
Under the desk
2022
Mixed media
160×110cm
p. 25

11
Under the desk
2022
Mixed media
160×110cm

12
Days Recorded: Night Walks
2022
Mixed media
12.6×5.6cm

13
Day by day,
2022
Mixed media
Dimensions variable
p. 30 (top)

14
Good night, Good morning
2022
Mixed media, installation
pp. 26–29, p. 30 (bottom), p. 31

—
Endo Kaori

15
Study: Xmas party 1945 and Tokyo Olympics 1964/ Okinawa
2022
Installation (video, photos, objects [parachutes, coke bottles, etc.], document)
pp. 40–49

Notes ・The data for each works is listed in the following order: Title/Year/Material/Size (H×W×D) ・All are from the artist's collection.

展覧会概要

あざみ野コンテンポラリー vol.13
CLOTH×OVER
糸と布　日常と生を綴る

2022年10月8日［土］– 10月30日［日］
横浜市民ギャラリーあざみ野 展示室1
休館日｜10月24日［月］
開場時間｜10:00 – 18:00
入場無料
主催｜横浜市民ギャラリーあざみ野［公益財団法人横浜市芸術文化振興財団］
助成｜芸術文化振興基金　NOMURA 野村財団
協力｜城西国際大学メディア学部

関連イベント

出品作家によるクロストーク
出演｜遠藤薫、小林万里子、ユ・ソラ
日時｜10月8日［土］14:00 – 15:30
会場｜3階アトリエ

ワークショップ
「私たちの住んでいる家」おうちのモケイをつくろう！
講師｜ユ・ソラ
日時｜10月22日［土］14:00 – 16:00
会場｜3階アトリエ

あざみ野カレッジ企画展関連講座
「ルース・アサワの芸術」
講師｜沢山遼（美術批評）
日時｜10月29日［土］14:00 – 16:00
会場｜3階アトリエ

学芸担当｜沼田英子、佐藤直子、日比谷安希子

インタビュー映像撮影・編集｜西野正将
CM 映像制作｜城西国際大学メディア学部クロスメディアコース

執筆｜遠藤薫、小林万里子、ユ・ソラ、佐藤直子
英訳｜平野真弓
ネイティブ校閲｜ドミニク・ジナンパン
撮影｜吉川周作
デザイン｜米山菜津子
印刷・製本｜株式会社野毛印刷社

編集・発行｜横浜市民ギャラリーあざみ野［公益財団法人横浜市芸術文化振興財団］
〒225-0012 横浜市青葉区あざみ野南 1-17-3
Tel. 045-910-5656 Fax. 045-910-5674

発行日｜2022年10月28日

©2022 The Publisher
©2022 The Artist and the Author All rights reserved.